

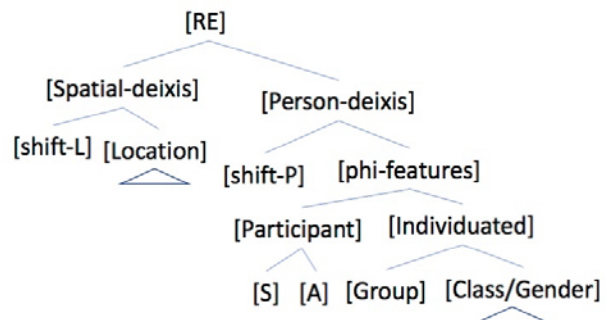
P3

参照表現とインターフェース
——素性の階層性に基づくアプローチ——
ドノヴァン・グローズ
(恒生管理学院 [中国])

要旨

本発表では、手話言語と口話の参照表現のシステムにおける、統一的な素性の階層性に基づく分析を提案し議論する。これは Harley and Ritter (2002) の分析と、Rathmann and Mathur (2011) の言語と身振りのインターフェイスについての分析を発展させたものである。口話では、参照表現は、人称、数、クラス／性の素性 (ϕ 素性) をコード付けするカテゴリカルな形態素である。手話言語においては、参照表現は部分的に身振りにより、 ϕ 素性に加えて、一人称と非一人称のみを位格の対照をマークすることで区別すると議論されてきている。ここで提案する素性階層では、文法的に関連する対照は、階層構造をもったノードとして表示され、これは談話の中で、参加者 (話者/手話話者[S]と受信者[A]) と非参加者である個人 (Individuated)を区別し、1人と多数のグループの指示対象を区別し、言語によって異なるクラス／ジェンダーを区別する。個々の参照表現はこの階層の下部構造として表される。口話においては、下部構造と形式の間のインターフェイスは、語彙化された代名詞か一致形態素で、構成しているノードはカテゴリーを決定し、システム間で相互作用している。手話言語においても、参照表現は語彙化していると考えることができ、たとえば全ての存在の類別詞の手形状は、クラス／ジェンダーの対照をマークし (すなわち、アメリカ手話における **Z**:vehicle (車) に対する **h**:aircraft (飛行機) のように)、一人称単数と複数の参照表現をマークする。非一人称の対照は、参照表現の発話の場所 (POA)を伴って指示され、これは語彙化された POA よりはむしろ、場所の身振りを伴うインターフェイスを通じた文脈によって決められる。ロールシフトは参照表現の人称的直示のシフトによって表され、下部構造において ϕ 素性ノードを支配していることを表示する。手話言語における位格の参照表現はこの分析に空間的直示 (Spatial-deixis) ノードとして組み込まれ、それもまたシフトが可能で、場所素性のノードを支配し、身振りの場所と身振りのシステムとともに手話言語のインターフェイスとして存在する。この基本的構造は下記に示すとおりである。

この観点から、手話言語における位格と非位格の参照表現は、双方とも非言語的な身振りの指示表現から派生したと想定される (Pfau and Steinbach, 2011)。しか



し、後者が前者から文法化したと想定するよりはむしろ、この分析は位格と非位格の人称と数の参照表現が身振りの指示表現から並行的に発達したと想定している。クラス／ジェンダーの対照による区別は、後の参照表現システムの個別言語的な精緻化である。

参考文献

- Harley, H. and E. Ritter. 2002. Person and Number in Pronouns: a feature-geometric analysis. *Language* 78(3).
- Pfau, R. and M. Steinbach. 2011. Grammaticalization in sign languages. *Oxford Handbook of Grammaticalization*. New York: Oxford University Press.
- Rathmann, C. and G. Mathur. 2011. A featural approach to agreement in signed languages. *Theoretical Linguistics* 37(3/4).